

接触場面と母語場面における母語話者の自己発話のくり返し の方法

— 日常的な接触経験と対話相手の日本語レベルの観点から —

平山紫帆 (立教大学)

The Use of Self-Repetition of Native Speakers in Contact and Native Situations: Focused on Contact Experiences with Non-Native Speakers and Interlocutor's Proficiency Level

Shiho HIRAYAMA (Rikkyo University)

キーワード： 自己発話のくり返し, 日本語レベル, 日常的な接触経験, 接触場面, 母語場面

Keywords: self-repetition, Japanese proficiency level, contact experience, contact situations, native situations

SUMMARY

In this paper, we focused on the usage of "self-repetition" by native speakers in contact and native situations where speakers meet for the first time, and searched whether "occurrence position" and "form" vary depending on Japanese proficiency level of their interlocutors (intermediate level learners, advanced level learners, native speakers) and the daily contact experiences of native speakers with non-native speakers.

1. はじめに

発話におけるくり返しは、「既出の発話を再度発話する」という行為である。これは、誰もが日々行う日常的な行為であると言えるが、コミュニケーション・ストラテジーの観点で捉えると、くり返しは、会話を円滑に進めるためのストラテジー (中田, 1992) であり、発話の理解や産出を促進するだけでなく、話者間の良好な人間関係の構築にも寄与することが指摘されている (Tannen, 2007)。

こうしたことから、くり返しは重要なコミュニケーション・ストラテジーであると言えるが、とりわけ、お互いの言語能力や文化の違いなどから誤解や問題が生じやすい接触場面においては、その重要性は一層増すものと思われる。もし、くり返しが効

果的に使用できれば、情報のやり取りがスムーズにできるようになり、話者同士の心的距離も縮められ、更に円滑なコミュニケーションを行うことができるようになるであろう。

では、接触場面での会話において、効果的にくり返しを使用すべきは、誰であろうか。これまでの接触場面研究やコミュニケーション・ストラテジー研究では、非母語話者の言語行動に関心が向けられやすかった。また、実際の接触場面においても、何らかのコミュニケーション上の障害が起きると、非母語話者側にその原因が帰属されやすく、行為を改善したり、ストラテジーを習得すべきなのは、非母語話者であると見なされたりする状況があると言える。だが、コミュニケーションを成立させ、人間関係を良好にするには、両者が互いに歩み寄ることが肝要であり、母語話者も、効果的なくり返しを使用したり、非母語話者にとってわかりやすい日本語を産出したりするなど、さまざまなストラテジーを習得することが求められている。

近年、注目されている「やさしい日本語」は、母語話者がコミュニケーションの成立に主体的に関与していく方法であると言え、様々な分野でのやさしい日本語が開発され、実践が進められていることは望ましい流れであると考えられる。だが、野田(2014)の指摘にあるように、現在のやさしい日本語は、書き言葉の書き換えが中心で、コミュニケーション的側面からの「やさしい日本語」の開発は十分になされているとは言えない状況である。しかし、くり返しなどのコミュニケーション・ストラテジーも、「やさしい日本語」として、十分機能すると考える。

では、どのようなくり返しが効果的で、どうすれば使用できるようになるのだろうか。そこで参考になるのが、母語話者の非母語話者との接触経験である。柳田(2015)によれば、母語話者の調整の方略は、接触経験を重ねることで学習されるという。そうであるならば、接触経験別の母語話者のくり返しの使用法を比較することで、母語話者が接触経験を通してどのようなくり返しの仕方を学習しているかがわかり、そこから効果的な使用法を類推することができるのではないだろうか。

そこで、本稿では、くり返しのうち、自分の発話を自分でくり返す「自己発話のくり返し」を対象に、接触経験の異なる母語話者が、実際の会話でどのようなくり返しを使用しているかを探る。

2. 先行研究

2.1 くり返しとは何か

前項では、くり返しを「既出の発話を再度発話する」行為であるとしたが、広義にくり返しを捉えると、言語は挨拶や成句、基本的構文、そして音韻などの諸側面において、過去に生成された言語のくり返しであると見ることができ、くり返しは言語の根底を成すものと言える(牧野, 1980; 中田, 1992; Tannen, 2007)¹。

こうしたくり返しを広く捉える立場から、Tannen(2007)は、くり返しを相手との関わり合いや一体感を達成するためのストラテジーと捉えた。そして、会話におけるくり返しは、①ことばの生成を容易にする、②聞き手の理解を促す、③発話や認識のつながりを明確にする、④会話の参加者同士や、参加者と文脈とをつなぐ、⑤会話の参

加者間の一貫した関わり合いを示す、という機能を果たすことを明らかにした。

中田(1992)も Tannen 同様、くり返しを「会話の方略」であるとし、その機能を詳細に分類するとともに、「誰の発話のくり返しか」「出現のタイミング」「形状」等のくり返しのタイプによって、使用される目的や表現効果が異なることを明らかにした。

2.2 自己発話のくり返しとは何か

くり返しを「誰の発話のくり返しか」という観点で分類すると、他者の発話をくり返す「対話相手の発話のくり返し」と、自分の発話をくり返す「自己発話のくり返し」とに大別できる。

日本語の談話におけるくり返しを扱った研究のうち、母語場面での自己発話のくり返しを対象に含めているものには中田(1992)、熊谷(1997)、松田(1998)、黒川(2006)等が、接触場面での自己発話のくり返しを扱ったものには大平(1999)がある。

まず、母語場面のくり返しについて、中田(1992)は雑誌に掲載された会話の文字化資料中のくり返しを分析した。その結果、自己発話のくり返しには、一方的な表出のはたらきがあることや、先行発話の直後になされたくり返しが発話への反応や感情を生き生きと伝えるのに対し、間をおいたくり返しは冷静な方策として使用されやすいということが明らかになった。

熊谷(1997)は、教室談話における教師のくり返しに着目し、コミュニケーション上の機能と、それが教室活動のどの段階で出現するかを分析した。その結果、教室活動の初めの「指示／質問」の段階では要点の強調や言い換えによる説明等が多く、「意見発表」時には受信応答・確認・問い返しや発言内容の再提示、感情移入などが特徴的に見られることが明らかになった。

松田(1998)は、談話に現れる反復表現の機能や反復の方法が、談話の種類や談話参加者の人間関係によって異なるかを分析した。その結果、反復の際にもとの発話に情報を付加し、コミュニケーションを進展させる「進展機能」の割合が、情報量を変化させずにコミュニケーションを支える「補強機能」よりも大きいこと、進展機能では自分の発話の反復の割合が他者の発話の反復の割合よりもやや高いことが明らかになった。

黒川(2006)は、日本語の会話に現れるくり返しの機能を質的に分析した。その結果、会話中の自己発話のくり返しには、フィラー、自己修復、強調といった機能が見られることが明らかになった。

以上、母語場面での自己発話のくり返しを扱った研究結果から、自己発話のくり返しが感情の伝達や情報のやり取り、さらにはコミュニケーションの進展と大きく関わっていること、そして、くり返しの使用法により、意味や効果に違いがあることが明らかになった。

次に、接触場面でのくり返しに関して、大平(1999)は、「質問一応答」連鎖の質問における日本語母語話者の言い直しの方法が、非母語話者の理解可能性とどのように関係するかを、質的・量的に分析した。その結果、母語話者は、「同義語、類義語の使用」、「パラフレーズ」、「くり返し」等の11種類の言い直しを使用しており、その

うち元の発話をそのまま反復する「くり返し」を最も多用していることが明らかになった。また、どのような言い直しをするかによって、非母語話者が文脈に応じた応答ができるかを示す「成功率」が異なり、言い直しがくり返しの場合には成功率が低いことが明らかになった。この結果は、接触場面において、自己発話の形式と非母語話者の理解度に関係があることを示唆するものであるが、「質問—応答」連鎖の質問部分での言い直しを対象としているため、それ以外の場合にもくり返しが多用されるのか、そしてそれが非母語話者の理解度とどの程度関わるかは明らかでない。

2.3 接触経験が調整行動に及ぼす影響

非母語話者との接触経験の多寡が、母語話者の調整行動に及ぼす影響を探った研究には、村上(1997)、増井(2005)、柳田(2015)、平山(印刷中)等がある。村上(1997)は、母語話者と非母語話者とのインターアクションにおける意味交渉の頻度に、接触経験が与える影響を検証するため、経験の長い日本語教師、経験の浅い日本語教師、非母語話者との日本語での接触の多い人(留学生別科の職員等)、接触がほとんどない人、の4グループを比較した。その結果、非母語話者と日本語による接触を頻繁に行う、日本語教師以外の母語話者が、最も多く意味交渉を行うことが明らかになった。この結果を、村上は、普段からそうした母語話者が、事務の職務遂行のために非母語話者と「意味のあるコミュニケーション」を行っているためであると分析している。

増井(2005)は、母語話者に、短期間のうちに異なる非母語話者とのタスクを5回行ってもらい、その5回の接触経験によって、意味交渉における母語話者の修復的調整がどのように変化するかを分析した。その結果、母語話者は、修復的調整を頻繁に行うようになり、調整方法も多様になることがわかった。また、「そのままの繰り返し」が減少し、新たな要素が付加された「加工された繰り返し」が増加することが明らかになった。

柳田(2015)は、接触経験によって2群に分けた母語話者と、非母語話者に、ビデオを別々に視聴させ、情報交換によってストーリーを完成させるというタスクを行った。その結果、接触経験の多い母語話者は、情報の授受に際して様々な方略を用いていることが明らかになった。

平山(印刷中)は、母語話者が使用する対話相手の発話のくり返しの「生起位置」と「形状」に注目し、母語話者の非母語話者との日常的な接触経験と、対話相手(中級学習者、上級学習者、母語話者)の日本語レベルとによって、くり返しの使用法に違いがあるかを分析した。その結果、接触経験の多い母語話者の場合、相手の日本語レベルが低いほど「直後」のくり返しや「再現型」のくり返しを使用すること、中級学習者に対する使用法で接触経験による違いが見られることが明らかになった。

以上の研究からは、接触経験の多寡により、くり返しを含む母語話者の調整行動は異なることが明らかになった。しかし、これらの研究は、対話相手のレベルの違いに注目しているものが少なく、相手の日本語レベルと接触経験の関係を分析したものは管見の限り、平山(印刷中)のみである。平山(印刷中)は対話相手の発話のくり返しを対象としているが、接触経験の多い母語話者が相手によってどのように自己発話

のくり返しを調整しているかが明らかになれば、実際の運用に役立てられると考えられる。

3. 研究課題

以上の先行研究の結果を踏まえ、非母語話者との日常的な接触経験と対話相手の日本語レベルによって、母語話者のくり返しの使用方法に差があるかを明らかにするために、本稿では平山（印刷中）を参考に、以下の研究課題を設定する。

RQ1：母語話者の非母語話者との接触経験や対話相手の日本語レベルによって、母語話者の自己発話のくり返しの生起位置に違いがあるか

RQ2：母語話者の非母語話者との接触経験や対話相手の日本語レベルによって、母語話者の自己発話のくり返しの形状に違いがあるか

4. 研究方法

4.1 くり返しの範囲

「くり返し」に関する研究は、談話のくり返しに限っても、多くの研究がなされてきた。しかし、その定義や対象とする範囲は研究者や研究目的によって異なり、確立した基準があるわけではない。

本稿は、中田(1992)にならい、くり返しを「既に発話されたことを再び発話すること」と定義する。

本稿で扱うくり返しの範囲は、中田(1992)を参考に、「先行する元の発話（以下、先行発話）が自分の発話として同一会話内で特定できるもの」（例1参照）とする。したがって、先行発話が対話相手の発話であったり（例2参照）、自分の発話か対話相手の発話かの判断できなかつたりするものは、対象に含めない（例3参照）。先行発話をどの程度再現しているかという再現の厳密性に関しては、中田(1992)の「一言一句違わぬ再現だけでなく、意味を保持した言い換えや要約も、下敷きとなった発話が特定できればくり返し」（中田, 1992, p.271）という基準にならい、対象とする範囲を広く設定する。そして、先行発話をほぼ同形でくり返すものだけでなく、発話の一部を変更していたり、くり返す際に情報を付加していたり、別の言葉に言い換えていたりするものも対象に含めることにする(4.3.2参照)。

(例1)(下線部は先行発話、太字はくり返しを示す。以下同様。)

A²：難しいよね。**難しい**でしょ、日本語³。

(例2)

B：でも高校の英語難しいよね。

A：難しいですよね<二人笑い>。(←対話相手の発話のくり返しなので対象外)

(例3)

B：去年の10月、あ(うん)、そろそろもしかしたら帰国が近いですか？。

A：ん帰国？。

B：帰国。(←先行発話が自分の発話か対話相手の発話か特定できないので対象外)

4.2 データの概要

本稿のデータは、日本語母語話者8名が、日本語中級学習者、上級学習者、及び日本語母語話者で行った、1対1の初対面自然会話(計24会話)のうち、開始から10分間、計240分間の音声データを宇佐美(2007)に従い文字化したものである。

本稿の目的は、母語話者の自己発話のくり返しの使用法を明らかにすることであるため、今回は、母語話者8名の発話を分析の対象とする。この母語話者は、都内の大学や大学院に在籍する20歳～23歳の日本語母語話者であり、性別は女性で統一した。そして、この8名のうち、データ収集時点で、特定の非母語話者との日本語を使用した接触が週に1度以上あり、それが半年以上継続している人を「接触経験の多いグループ」(4名)、そのような接触経験がないか、以前に経験していても、接触のない期間が調査時点で3年以上継続している人を「接触経験の少ないグループ」(4名)とした。

対話相手(日本語中級学習者、上級学習者、日本語母語話者)は、分析対象の母語話者と同じ都内の大学及び大学院に在籍する学生(平均年齢22.7歳)である。対話相手の違いによる差を抑えるために、中級学習者、上級学習者、日本語母語話者の計3名は固定した。つまり、各日本語レベルの対話相手は同一であるということである。学習者の国籍は台湾で統一し、学習者の日本語能力は、日本語中級クラスに在籍する交換留学生を中級学習者、大学院で日本語を研究する大学院生を上級学習者とみなすことにした。

会話の話題は特に指定せず、自由に会話をするように依頼した。

4.3 分析方法

4.3.1 くり返しの生起位置

本稿は、中田(1992)と永田・大浜(2011)を参考に、くり返しが、先行発話に対してどのような位置で出現するかという観点から、母語話者の自己発話のくり返しを①直後と②非直後に分類することにする。

表1 くり返しの生起位置

	定義	例
①直後	先行発話と同じ発話文内、もしくは実質的に連続する発話文内で生起するもの	B：しゅ、出身はどこ？。
		A：出身は <u>横浜</u> の、あ、うん <u>横浜</u> (<笑い>)。
		A：うん、先生と、あたしと友達(ん)三人だと、今日私発表<だと来週>{<},、
		B：<あー来週は>{>}。
		A：友達(うん)、その次また私とかいって(あー)

		もう隔週で。 B：そっか。 A：二週間おきに(へー)。
②非直後	元の発話が提示された後、他の発話(あいづちを除く)が挟まれてから生起するもの	A：難しいでしょ, 日本語。 B：うん(<笑い>), ちょっと。 A：日本人でも難しいよ。

4.3.2 くり返しの形状

中田(1992)を参考に、くり返しが、先行発話の形状をどの程度再現しているかという観点から、母語話者の自己発話のくり返しを①再現型、②一部変更型、③補足型、④言い換え型、の4つに分類する(表2)。

表2 くり返しの形状

	定義	例
①再現型	ほぼ同じ形でくり返したもの	A：いいね, いいね , 途中下車で。
②一部変更型	多少の変更を加えたもの	A：すごい かっこいい , って思って。 かっこいいじゃないですか<笑い> 。
③補足型	くり返す際に情報を追加したもの	A：あ, <u>それはだめだけど</u> 。 それはうちもだめだけど 。
④言い換え型	意味を保持して言い換えたもの	A：でもぜん, 全部 上り電車 なの, 今度は。 B：えー。 A：まあ 中央に来る<電車だから> {<}。

5. 結果

5.1 くり返しの生起位置

本稿の全データの発話文数は、母語話者が 2,751 (接触経験が多いグループ 1,496, 少ないグループ 1,255), 対話相手が 2,890 (中級母語話者 1,113, 上級母語話者 949, 母語話者 828) で、合計 5,641 であった。自己発話のくり返しについては、本稿のデータから合計 491 のくり返しが得られた。接触経験と対話相手別の自己発話のくり返し数を表3に示す。

表3 自己発話のくり返し数

	中級 学習者	上級 学習者	母語 話者	計

接触経験(多)	120	83	45	248
接触経験(少)	75	95	73	243
計	195	178	118	491

くり返しの生起位置に関して、合計 491 の自己発話のくり返しを生起位置別に分類したところ、「直後のくり返し」は 314、「非直後のくり返し」は 177 得られた。

まず、接触経験と対話相手の日本語レベル別の「直後のくり返し」の生起数の平均を図 1 に示す。

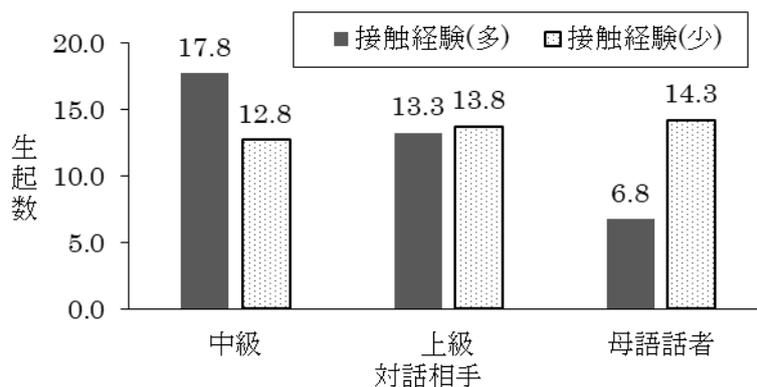


図 1 直後のくり返しの生起数 (平均)

これを見ると、接触経験の多い母語話者は、中級学習者に対して最も多く「直後のくり返し」を使用しており、対話相手の日本語レベルが上がるにつれて、その生起数が少なくなっていることがわかる。一方、接触経験の少ない母語話者の場合は、対話相手の日本語レベルが上がるにつれて、「直後のくり返し」の生起数が微増している。

そこで、これらに統計的な有意差があるかを見るために、「接触経験(2 水準)×対話相手(3 水準)」の 2 要因分散分析を行った。その結果、「直後のくり返し」は、接触経験と対話相手の交互作用($F(2,12)= 7.136, p<.01$)と対話相手の主効果($F(2,12)= 4.197, p<.05$)が見られた。単純主効果検定およびライアン法による多重比較検定の結果、接触経験の多い母語話者は、中級学習者と上級学習者が対話相手である場合に、母語話者が相手の場合よりも多くの「直後のくり返し」を使用することが明らかになった ($p<.05$)。接触経験の少ない母語話者については、対話相手による違いは確認できなかった。

次に、「非直後のくり返し」の接触経験と対話相手別の生起数の平均を図 2 に示す。

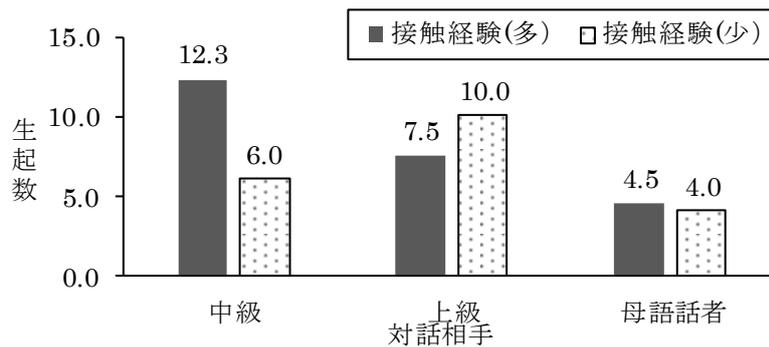


図2 非直後のくり返しの生起数 (平均)

図2を見ると、「直後のくり返し」と同様に、対話相手の日本語レベルが上がるにつれて、接触経験の多い母語話者の使用する「非直後のくり返し」の生起数が減少していることがわかる。接触経験の少ない母語話者の場合には、そうした傾向は見られない。そこで、統計的な有意差があるかを確認するため、「接触経験(2水準)×対話相手(3水準)」の2要因分散分析を行った。その結果、対話相手の主効果が見られたものの($F=4.160, p<.05$)、ライアン法による多重比較検定を行ったところ、対話相手の違いに有意差は確認できなかった。

5.2 くり返しの形状

母語話者が使用した491の自己発話のくり返しを形状別に4つに分類したところ、「再現型」が134、「一部変更型」が55、「補足型」が116、「言い換え型」が186得られた。これらについて、接触経験と対話相手の日本語レベルによる差を確認するために「接触経験(2水準)×対話相手(3水準)」の2要因分散分析を行ったところ、「再現型」と「補足型」で以下の有意差が確認できた。

まず、「再現型」では、接触経験と対話相手の交互作用($F(2,12)=4.385, p<.05$)と対話相手の主効果($F(2,12)=4.557, p<.05$)が見られた。単純主効果検定およびライアン法による多重比較検定の結果、①接触経験の多いグループは、対話相手が中級学習者の場合、上級学習者や母語話者が相手の場合に比べて、有意に多くの「再現型」のくり返しを使用している($p<.05$)こと、②対話相手が中級学習者の場合に、接触経験による違いが見られ、経験の多いグループの方が有意に使用数が多い($p<.05$)こと、が明らかになった(図3)。

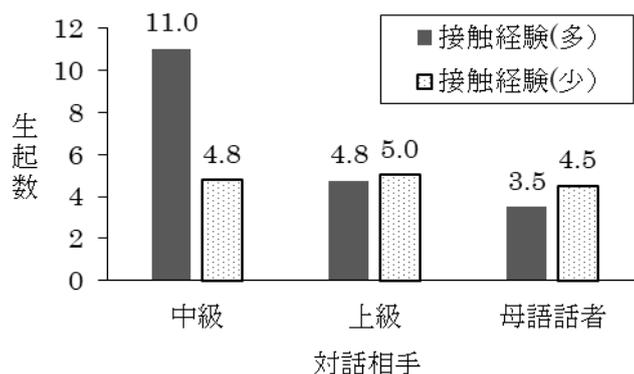


図3 再現型のくり返しの生起数 (平均)

次に、「補足型」では、接触経験と対話相手の交互作用($F(2,12)=6.607$, $p<.05$)と対話相手の主効果($F(2,12)=4.443$, $p<.05$)を得た。単純主効果検定およびライアン法による多重比較検定の結果、接触経験の多いグループは、中級学習者に対して、上級学習者や母語話者を相手にする場合よりも多くの「補足型」のくり返しを使用することが明らかになった ($p<.05$) (図4)。

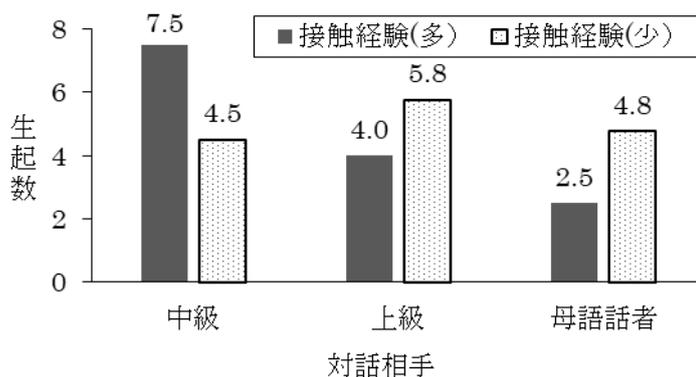


図4 補足型のくり返しの生起数 (平均)

「一部変更型」「言い換え型」では、「接触経験」と「対話相手」の交互作用および主効果が確認できなかった。

6. 考察

以上の結果を研究課題とともにまとめると、まず、RQ1の「自己発話のくり返しの生起位置に違いがあるか」に関しては、接触経験の多い母語話者は、相手が中級学習者と上級学習者である場合に、母語話者が相手の場合よりも「直後のくり返し」を多用することが明らかになった。

次に、RQ2の「自己発話のくり返しの形状に違いがあるか」については、「再現型」と「補足型」で接触経験や対話相手による違いが見られた。「再現型」では、経験の多いグループは中級学習者に対して多くの「再現型」を使用することと、中級学習者が

相手の場合に、接触経験による差があり、経験の多いグループの方が「再現型」を多用することが明らかになった。「補足型」に関しては、接触経験の多いグループが、中級学習者に対して「補足型」のくり返しを多用することが示された。

そこで、以下ではこうした差が生じることに関して、本稿の会話データを参照しながら考察を行う。

まず、接触経験の多い母語話者が非母語話者に対して「直後のくり返し」を多用するのはなぜだろうか。

会話例1 (NNU：上級学習者，BA02：接触経験の多い母語話者)

	話者	発話内容	生起位置
1	NNU	へー、えなんで「学科名」、あのシェークスピアの作品読むんですか？。	
2	BA02	あ、それは、あの英語の(うん)、英語の教職のための授業なので、(あー)「学科名」では全然関係ないんです。	
3	NNU	へー、教職、科目？。	
4	BA02	はい、 教職科目で、英語の教師になりたい人の、(うーん)ためのコースで 、(あー)授業がやっぱり英語ですから、'英、イギリスと(うん)アメリカとか(うんうんうん)、そういった関係が多くなってきます。	直後

会話例1は、上級話者NNUと、接触経験の多い母語話者BA02が、BA02が履修している教職科目について話をしている場面である。上級学習者NNUはBA02が所属学科とは関係がないシェークスピアの作品を読んでいるということに疑問を感じ、1で理由を尋ねたが、BA02の返答の中の「教職のための授業」というのが不明確であったため、3で聞き返した。するとBA02は4で一旦相手の「教職科目」をくり返し、その直後に「英語の教師になりたい人のためのコース」と言い換え形式のくり返しを行っている。

このような、言い換えや説明を加えるくり返しの場合には、元の発話とくり返しが離れてしまうと、その関係性が見えにくくなってしまいが、直後にくり返せば、つながりを明確に示すことができる。これはミスコミュニケーションの起こりやすい接触場面における会話では、特に有効な方法であると考えられる。

接触場面において、自己発話のくり返しを直後に行うことには、他の利点もある。

会話例2 (NNU：上級学習者，BA03：接触経験の多い母語話者)

	話者	発話内容	生起位置
1	BA03	かっこいいとかって<言われる>{<}。	
2	NNU	<かっこいい>{>}ですね。	
3	BA03	んでも、彼女はなんか(<笑い>)、寂しいみたいで、それが<笑いながら>。	
4	NNU	こないだ変身させたよ。	

5	BA03	あ。	
6	NNU	女の子に。	
7	BA03	あ、かっこを?。	
8	NNU	そうそうそう、きれいな厚化粧、してあげて、	
9	BA03	えー[高い声で]。	
10	NNU	でワンピースを着させて<笑いながら>。	
11	BA03	どうだった?<笑いながら>。	
12	NNU	しつこく(うん)アイ、アイドル、	
13	BA03	ほんと?<笑いながら>。	
14	NNU	アイドルみたい<笑い>。	
15	BA03	え、 <u>見たい見たい</u> 。	直後
16	BA03	=写真撮っといってくれた?。	
17	NNU	撮った撮った。	
18	BA03	え、ちょっと見せて<笑いながら><二人笑い>。	

会話例 2 は、接触経験の多い日本語母語話者 BA03 が、上級学習者 NNU との共通の女性の友人について話をしている場面である。いつもはあまり女性らしい恰好をしない友人を NNU がアイドルのように変身させたという話に対し、BA03 は 15 で「見たい見たい」と反応を示している。中田(1992)は、先行発話に連続するくり返しは、反応や話者の感情を生き生きと表せるとしているが、この例を見ても、「見たい見たい」と連続させることで、BA03 は自身の感情を生き生きと表現しているように見える。自己発話のくり返しは「主として一方的な表出のはたらき」(中田, 1992, p.295)があるとされているが、自己発話のくり返しを先行発話の直後にくり返すことによって、自分自身の内側の感情を強く押し出し、自分の感情を生き生きと表すことができると考えられる。

そして、そうした感情の表現は、話題内容に対して興味や関心を感じているということをも表す。接触場面では、コミュニケーション上のトラブルが起きやすいため、会話を続行し、進展させるには注意が必要であるが、会話への積極的な態度を示すことは会話を維持・進行させるために有効な方法であると思われる。

このように、自己発話のくり返しを先行発話の直後に行うことには、つながりを明確にする、感情を生き生きと表現する、という効果があるが、直後のくり返しの生起数に接触経験による差が見られたことから、母語話者は接触経験を積むことによって、その効果や有効性を学んでいくものと考えられる。

次に、くり返しの形状で「再現型」「補足型」が中級学習者に多用された点について考察する。

に関するやり取りが続いたが、12でBA03が「都心じゃないほうに行く電車」という説明をすると、NNMの関心は「都心」ということばに向けられ、その「都心」の意味交渉が13から15まで続くことになった。しかし、「下り電車」の説明では、「都心」ではなく「都心じゃないほう」という点が重要であるため、BA03は16で「じゃないほう」と、12の自分の発話を再現形でくり返し、話を「下り電車」に戻している。非母語話者の日本語のレベルが低い場合には、語彙量や聞き取りの問題から、発話の一部に注意が向けられやすいと考えられるが、上記の例のように再現形のくり返しを用いると、元の発話との結束性がより明確に示せるため、談話の流れを管理しやすくなるのではないだろうか。

以上の2つのケースは、いずれもコミュニケーション上のトラブルが生じた場合、もしくは生じた場合の修正に関するくり返しと言えるが、トラブルとは関わらない場合にも再現形は使われる。

会話例4 (NNM：中級学習者，BA02：接触経験の多い母語話者)

	話者	発話内容	形状
1	NNM	え、あの、学校の近くで住んでる？。	
2	BA02	学校の近く…はい、住んでます、「地名1」。	
3	NNM	ふーん、あだから、毎日歩い、あ、自転車くだよね><。	
4	BA02	<自転車><{}自転車<少し笑いながら>。	再現型

会話例4は、中級学習者NNMと接触経験の多い母語話者BA02との会話であり、NNMがBA02の居住地について尋ねている場面である。BA02が学校の近くに住んでいるということからNNMはBA02が自転車で通っていると推測し、3で確認を要求した。BA02は、3の発話が終わらないうちに、その意図を読み取り、4で「自転車自転車」とくり返しながらか確認を与えている。ここでは、「自転車」だけの返答でもやり取りが成立すると思われるが、BA02は、なぜ再現型のくり返しを用いているのだろうか。

平山（印刷中）は、相手からの確認要求発話をそのままの形式でくり返す方法は、相手の発話が正しいというシグナルを送ることになると指摘している。それを会話例4のように、同じ形で連続させれば、そうしたシグナルが強調され、非母語話者の推測を積極的に承認していることを示すことができるのではないだろうか。

また、中田(1992)は、直後のくり返しは、会話のやりとりのテンポをよくすると指摘しているが、「自転車自転車」と同じ形を重ねることで、会話にリズムが生まれ、会話の雰囲気や軽やかにしている。こうした方法は、会話への参加しやすさを高めると考えられ、その意味でも接触場面で有効な方法であると言えるだろう。

次に、「補足型」が中級学習者に多用される点について考察する。

会話例5 (NNM: 中級学習者, BA05: 接触経験の多い母語話者)

	話者	発話内容	形状
1	NNM	<時々>{>}電車も, <なんか暑くて>{<},,	
2	BA05	<そう, 電車きらい>{>}。	
3	NNM	なんかなんかエアコン,,	
4	BA05	そう。	
5	NNM	み, やって,,	
6	BA05	あ。	
7	NNM	エアコンがや, やってない。	
8	BA05	やってるけどなんかたまにね, 「弱冷房車」 <u>っていうのが</u> (あ)あって, 寒がりの人のために弱冷房車があるんだけど,,	補足
9	NNM	しゃ, しゃ, 何, 何房車?。	
10	BA05	えっとね, 弱[強い声で], ,,	(再現)
11	BA05	「弱い」って書いて, <で弱冷房, 車>{<},,	補足
12	NNM	<はいはいはいはい, はいはいはいはいはい>{>}。	
13	BA05	って書いて, (うん)そこは冷房の出るのがすごい, 何だろ う, 静か, で, なんか, 寒がりの人が, 寒くないように,,	補足
14	NNM	はいはい。	
15	BA05	してる感じで。	

会話例5では、中級学習者NNMと母語話者BA05が、電車の「弱冷房車」について話をしている。NNMが、3, 5, 7で電車のエアコンがついていないと述べると、BA05は8で、それはエアコンがついていないのではなく、「弱冷房車」であるためであると説明しているが、その際、BA05は一度「弱冷房車っていうのがあって」と述べ、その直後に、「寒がりの人のために」という情報を補足しながら、説明をくり返している。そして、「弱冷房車」がすぐに理解できなかったNNMが9で「しゃ, しゃ, 何, 何房車?」と聞き返すと、10はまず「弱」という答えを端的に提示した後、すぐに「弱いって書いて弱冷房車」と、耳で聞いてわかるような漢字の説明を加えながら、再度「弱冷房車」をくり返している。そこでNNMは理解を示したが、BA05は続けて弱冷房車の説明を続け、8の「寒がりの人のために」の部分も、「寒がりの人が、寒くないようにしてる感じで」と補足説明を行っている。

今回の会話データのうち、接触経験の多い母語話者と中級学習者の会話からは、上記の例のように、一旦発話をした後に補足情報を加えた形でくり返すという例が、数多く抽出された。

なぜ、中級学習者に対して、このような補足説明が多用されたのだろうか。そこには、元発話とくり返しの発話の類似度が大きく関係しているように思われる。

柳田(2015)は、自己発話の修正の方法を「情報の再構成の程度」から分類している

が、それによると、「繰り返し」はもっとも再構成の度合いが低く、「詳述化・簡略化」「同義語・類義語／多言語言い換え」が中程度、「パラフレーズ、例示」が最も再構成の程度が高いという。本稿の「補足型」はこのうちの「詳述化」にほぼ該当することから、補足型の再構成の程度は中程度だと考えられる。日本語レベルの低い相手の場合、情報の再構成をしすぎると、元発話との関連が見えづらくなり、くり返しとして提示したものが、新たな発話として受け取られかねない。そうなると、相手に認知的に負担をかけることになる。しかし、元の発話を残し、補足説明を加えるという中程度の再構成であれば、元発話との関係も保持することができ、かつ、必要な説明も加えられるため、日本語能力の限られた相手に対しては有効な方法であると言えるのではないだろうか。

以上、「再現型」「補足型」が中級学習者に多用される理由を考察した。では、そこに接触経験による差が生まれるのはなぜだろうか。柳田(2015)は、接触経験を積んだ母語話者は、非母語話者が言語的にどのような問題を抱えているかを察知し、それに援助ができるようになる」と指摘している。今回のデータで接触経験による違いが見られたのも、接触経験の多い母語話者が、相手の遭遇しそうな問題を予測し、その場に応じた方法を選択したためであると考えられる。

7. まとめと今後の課題

本稿では、非母語話者との日常的な接触経験及び対話相手の日本語レベルによって、母語話者の使用する自己発話のくり返しには違いがあり、接触経験の多い母語話者は、非母語話者に対して「直後のくり返し」を、中級学習者に対しては、「再現型」と「補足型」のくり返しを多用することが明らかになった。この結果は、接触場面での効果的なくり返しの使用法を明らかにし、「やさしい日本語」をコミュニケーションの観点から開発していく上で重要な結果であると考えられる。

しかし、今回は、出現位置と形状を個別に分析した。自己発話のくり返しの使用法特徴を詳細に分析するためには、両者を統合させる必要がある。また、自己発話のくり返しだけでなく、他者の発話のくり返しとの違いについても考察する必要がある。今後の課題としたい。

注

1 くり返しがこのように広範な現象を含むため、「くり返し」の研究と言っても、それが表すものや対象とする現象は研究によって異なるというのが現状である。

2 本稿の会話例は A：母語話者、B：対話相手である。

3 本稿の例で用いた主な記号は以下の通りである。(宇佐美, 2007 による)

。 1 発話文が終了したことを示す。

?。 質問や確認の発話文が終了したことを示す。

< >{<} < >で囲まれた部分が、他者に発話を重ねられた部分であることを示す。

< >{>} < >で囲まれた部分が、発話を重ねた部分であることを示す。

() 相手の発話に重なる、短く、特別な意味を持たないあいづちを示す。

< > 笑いながら発話したもののや笑い等の説明を記す。

参考文献

- Tannen, D. (2007). *Talking voices: Repetition, dialogue, and imagery in conversational discourse*. Second Edition. New York: Cambridge University Press
- 宇佐美まゆみ. (2007). 「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版」. 『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度科学研究費補助金基盤研究B(2)(研究代表者宇佐美まゆみ)研究成果報告書
- 大野陽子. (2001). 「初級日本語学習者の『聞き返し』のストラテジーと日本語母語話者の反応」. 『三重大学留学生センター紀要』3, 83-92.
- 大平 未央子. (1999). 「接触場面の質問：応答連鎖における日本語母語話者の『言い直し』」『多文化社会と留学生交流：大阪大学留学生センター研究論集』3, 67-85.
- 岡部悦子. (2003). 「課題解決場面における『くり返し』」. 『早稲田大学日本語研究教育センター-紀要』16, 97-116.
- 尾崎明人. (1993). 「接触場面の訂正ストラテジー---『聞き返し』の発話交換をめぐって(中間言語研究)」. 『日本語教育』81, 19-30.
- 黒川直子. (2006). 「日本語の談話における繰り返しの考察」. 『Icu 日本語教育研究』3, 65-79.
- 熊谷智子. (1997). 「教師の発話にみられるくり返しの機能(特集 授業の談話分析)」. 『日本語学』16:3, 30-38.
- 中田智子. (1992). 「会話の方策としてのくり返し」国立国語研究所(編)『国立国語研究所報告104 研究報告集13』267-301.
- 永田良太・大浜るい子. (2011). 「道聞き談話における日本語母語話者と日本語学習者の言語行動の比較」. 『教育学研究ジャーナル』8, 41-50.
- 野田尚史. (2014). 「『やさしい日本語』から『ユニバーサルな日本語コミュニケーション』へ」. 『日本語教育』158, 4-18.
- 平山紫帆. (印刷中). 「接触場面と母語場面における母語話者のくり返しの方法—日常的な接触経験と対話相手の日本語レベルの観点から—」. 『日本語・日本語教育』
- 増井展子. (2005). 「接触経験によって日本語母語話者の修復的調整に生じる変化—共生言語学習の視点から—」. 『筑波大学地域研究』25, 1-17.
- 牧野誠一 (1980). 『くりかえしの文法』. 東京：大修館書店.
- 松田文子 (1998). 「日常談話における反復表現の機能に関する一考察」. 『言語文化と日本語教育』16, 58-69.
- 村上かおり. (1997). 「日本語母語話者の『意味交渉』に非母語話者との接触経験が及ぼす影響：母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて」. 『世界の日本語教育. 日本語教育論集』7, 137-155.
- 柳田直美. (2015). 『接触場面における母語話者のコミュニケーション方略—情報やりとり方略の学習に着目して—』. 東京：ココ出版